

2020年11月29日 司祭 越山 哲也
八戸聖ルカ教会

降臨節第1主日 説教

「イエスも知らないその時？イエスの生き方とは？」

〔旧約聖書〕 イザヤ書 63:19~64:8 〔使徒書〕 コリントの信徒への手紙Ⅰ 1:1~6 〔福音書〕 マルコによる福音書 13：(24~32)、33~37
--

主の平和が皆さんと共にありますように。

教会の暦は今日から降臨節に入りました。

1年の始まりです。アドヴェントは英語ですが、これはラテン語のアドヴェントス「到来する」から来ています。

私たちの信仰は「主を待ち望む」ことであることを1年の始めにあたり一緒に確認したいと思えます。

アドヴェントには、2つの意味があります。一つは「クリスマス」、そして「世の終わり」です。

読まれる福音書も大変緊張感のある内容です。

世の終わりがいつ来るかは誰も分からないから「目を覚ましていなさい」という言葉が3回も出てきます。

クリスマスというと気持ちが浮かれがちになりますが、そんな私たちにとって真の喜びである招きを受けていることを今日与えられた福音書から受け取りたいと思います。

しかし、結論から言うと、私たちは「目を覚ましていられない」のです。あのゲッセマネの園でイエスがまもなく逮捕される直前の夜、大変緊張感のある時であったにも関わらず弟子たちは目を開けている

ことが出来ずに眠っていました。

イエス自身もゲッセマネで苦しまりました。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。」(ルカ 22 : 42 ~ 44)

また、意外かもしれませんが、本日の福音書の中に「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」(マルコ 13 : 32) とある箇所に注目したいと思います。

世の終わりは、つまりイエスの再臨の時はイエスも知らないと言うのです。ゲッセマネの場面でもイエスは神の子でありながら徹底的に私たちと同じ人であられたのです。苦しみを遠ざけてください。しかし、どこまでも父なる神の意志に従おうとする姿が記されています。そして、苦しみ、もだえ汗が血の滴るように地面に落ちたとあります。そして、そんな苦しむイエスを天使たちが力づけたのです。

私たちは目を覚ましていられないと最初に述べましたが、眠れない日々もあります。それはどんな時でしょうか。「家族や友人が重い病にかかっている」「明日、大変な仕事を抱えている」など本当に心が不安でおしつぶされそうになった時に私たちは眠れない夜を過ごします。寝れないことは本当につらいことですし、体をむしばみます。

ですから、ゲッセマネで弟子たちが眠ってしまったり、今日のたとえ話で「目を覚ましていなさい」と私たちに言われても私たちが「目を開けていられないのは」その実感がないからだと思います。

弟子たちもイエスが本当に逮捕されるとは実は思っていなかったから、そして私たちも再臨を待ち望む信仰と言いながらその実感がないから「目を覚ましていられない」のだと思います。

そして、その日はイエスご自身も知らないと言うのです。しかし、今日私たちがしっかりと心に留め

たい「福音」はイエスが苦しみもだえながらも十字架の道を受け入れていく祈り、つまり私たちのために血の滴る祈りを捧げてくださっている、支えてくださっていることです。

そして、人知れず天の使いが私たちを支えてくれているのです。天使も「その日」がいつかは分かりません。

わたしはここでいう天使は私たち一人一人なのではないかと思うのです。人は必ず支えられて生きています。

私も本当に支えてもらって生きています。支えてもらっているということには「目を開いていたい」と思うのです。クリスマス礼拝の案内によく「みんなで誘い合ってクリスマス」をお祝いしましょうと私も書きますが、その意味は、いま一度「わたし」は「あなた」という神さまから遣わされた天の使いによって支えられていることに思いをはせることなのではないでしょうか。

イエス様ご自身がひたすらに私たちのために祈り続けてくださっていること、そして「わたし」のために今も人知れず祈り、支えてくださっている「あなた」という天からの使いを通して私たちは具体的にイエスの愛を知ることが出来ます。

これが今日、私たちに与えられた「福音」、良き知らせです。

再臨の日まで互いに、互いの天使になって支え合って行きましょう。その事をアドヴェントを迎える最初の日にご一緒に今日の礼拝を通して感謝し、確認できればと思います。